

イグアノドンの唄

——大人のための童話——

中谷宇吉郎

青空文庫

カインの末裔まつえいの土地

終戦の年の北海道は、十何年ぶりの冷害に見舞われ、米は五分作か六分作という惨めさであった。豊作でさえ米の足りない北海道のことであるから、この年の冬は、誰も彼も皆深刻な食糧危機におびやかされた。

それにこの冬は、例年にならない珍しい大雪であった。毎日のように、暗い空からは、とめどもなく粉雪が降りつづき、それが人々の生活の上に重苦しくおおいかぶさっていた。この雪に埋れた不安な生活の上に、陰鬱いんうつな日々がただ明け暮れて行くのを、じつと我慢して春を待つより仕方がなかった。

私たち一家は、この冬を、羊蹄ようてい山麓さんろくの疎開先で送った。此処ここは有島ありしまさんの『カインの末裔』の土地であつて、北海道の中でも、とくに吹雪の恐ろしいところである。「吹きつける雪のためにへし折られる枯枝がややともすると投槍なげやりのように襲つて来た。吹きまく風にもまれて木という木は魔女の髪のように乱れ狂った」というのは、有島さんの有名な描写である。この荒涼たる吹雪の景色は、今日も少しも変らない。そしてこの無慈悲

な自然の力に虐げられて、いる人間の姿もまた、往年の名残りを止めている。

終戦の年の冬は、この自然の猛威の外に、今一つ食糧危機という恐ろしい脅威が加わっていた。見渡す限りの土地は雪に埋れている。吹雪の日には、雪までも白くはなく、死んだような灰色である。葉の落ちた闊葉樹はもちろんのこと、雪に蔽われた針葉樹にも、緑の色は全然見られない。この一点の緑もない世界、満目唯唯灰色一色の世界では、食糧の不安感が、ひしひしと人の心に迫る。「雪が解けて、たらの芽でも何でも、青いものが出て来るようになれば」と、人々は遠い春をはるかに望んで、力弱い溜息をもらす。

北海道の長い冬休みを、子供たちとこの疎開先で過した。遊び道具も本もない疎開先の生活で、とくに連日の吹雪の夜など、子供たちはよく私に話をせがんだ。幸い薪だけは豊富にあつたので、どんどんストーヴにくべて、その周囲に皆が寄りそっていた。勢よく燃える薪の音が、戸外の激しい風の叫びをわずかに押えて、生命の営みを辛うじて表象しているというような夜が、毎晩つづいた。電燈はもちろんうす暗かった。凄じい風の音につつまれながら、それは妙に気の滅入る沈黙の世界であつた。

『失われた世界』

子供たちは、もう浦島太郎うらしまたろうの時代をとくに過ぎていたので、話といっても、そう種はなかつた。それに本も手近かにはないので、すぐ話の種につまって、大いに弱らせられていた。ところがどうしたはずみか、荷物を片づけているうちに、妙な本が一冊ころがり出て来た。コナン・ドイルの『失われた世界』ロスト・ワールドの廉価本れんかほんである。

これはもう二十年も前に、倫敦ロンドンでデーケ博士から貰もらった本である。オランダの理論物理学者であるが、理研リケンで暫しばらく一緒にいたことがあるので、その後も親しくしていた。そのデーケが倫敦の学会へやって来た時、ホテルのロビーでこれを読んでいた。そして別れしなに、丁度読み終ったこの本を、私に残して行ってくれたのである。その時はすぐ読んでみて、たいへん面白かったのであるが、それなりに忘れてしまっていた。それが二十年の後に、敗戦後の北海道の僻地へきちで、わずかな疎開荷物の中から、ひょっくり現れたのである。

これはまことに大助りであった。南米アマゾンの秘境、人界から遠く隔絶された「失われた世界」に、ジュラ紀時代から生き残っている巨大爬虫類はちゆうるいが棲すんでいる世界がある。その秘密を求めて、英国の科学者たちが、敢然魔境に踏み入って行く。この「探検記」こ

それは、カインの末裔の土地で、連夜の吹雪にとじこめられている敗戦国の子供たちにとっては、何よりの贈り物であった。

「この本は、英国のチャレンジャー教授という先生が、南米のアマゾン河のずっと上流のところ、もちろん人間など一度も行ったことのない秘密の世界なんだが、そこへ探検に行った時の報告なんだ。古代の恐ろしい竜だの、怪獣だのが其処そこに本当にいたんだよ。何時いつか雑誌で見たでしょう。デインザウルス（恐竜）なんていう竜の中には、このおうちの三倍くらいもある大怪物もいたんだが、それがのそつのそつと歩いていてね。イグアノドンなんていうのもいたんだよ。ああいう竜は、ジュラ紀と違って、一億年以上も昔の時代には、たくさんいたことがよく分っているんだ。化石になって残っているからね。それが今でも生きていて、そういう古代の生物ばかり住んでいる世界が、アマゾン河の上流にはあるんだ。どうだ、今夜からこの本を一節ずつ読んでやろうか」というと、もちろん子供たちは、歓声をあげた。

まだ小学校へ行っている下の男の子などは、もうそれだけで、すっかり上気してしまつた。頬ほおを赤くしながら、眼を輝かせて、「本当？ 本当？」と、覗のぞき込む。もちろん小説であるから、写真や図などはない。幸い秘境いたに到る道順を描いたスケッチ地図が、一枚だ

けついていたので、それを説明してやると、この方は簡単に承服してしまった。

「これが断崖だんがいだよ。低いところで千尺じやく、高いところは三千尺もある。真直まっすぐにつき立った岩壁ですつと囲まれているんで、この崖がけの上は、外の世界からすつかり切り離されているんだ。だからこういうところに、古代の生物が生き残っていても、誰も知らなかったわけだよ。もつともこの断崖へ行くまでが、たいへんなんだ。これがアマゾン河の上流で、ここだつて普通の船は行かないところなんだ。これからこの支流を小さい丸木舟でのぼつて行くんだが、もちろん普通の人間は誰も行つたことのないところさ。それでもこの辺までは、まだ人食ひとくし人種がとどころにいてね、道など一本もない恐ろしい密林の奥から、首切りの祭の太鼓の音が、かすかに聞えて来ることもあつたのさ。しかしこの細くなつているところね、これから先は、カヌーも行けなくなるんで、みんな荷物をせおつて歩いて行つたんだよ。もうここまで来ると、人食人種だつていなくなつて、人間なんて、全然いないところになつちやうのさ。ほら此処ここに印をつけてあるだろう。此処で初めてプテロダクテイルを見たんだよ。プテロダクテイルつて、翼のある竜なんだ。戦闘機くらいもあるかな」

ここらあたりで、下の子供はもうすつかり興奮してしまつて、すうすうと寝息のような

息をしている。そして眼を光らせながら、身動きもしない。二番目の娘も「本当らしいわ。よくそんな本があったね」という。唯一人、もう女学校にはいつていた長女だけが、なかなか承知しない。「小説でしょう。小説みたいな本じゃないの」と、英語が分りもしないくせに、生意気なことをいう。

科学の素晴らしい進歩によつて、人間はもう地球上のことは、何もかも知り尽くしたように思っている。しかしまだ何が隠されているか知れたものではない。『ロスト・ワールド』の恐竜や翼肢竜よくしりゆうこそは、さすがにその現存の可能性は考えられないが、それに類する事件は、近代になつても、時々実際に起つている。少し昔の話でよければ、南米の海岸に、牛くらの大きさの動物で、脚が六本ある怪物の屍体したいが、漂着したことがある。大部分腐つていたので、その詳細な記録は残っていないが、そういう怪物が、まだ神秘の大洋の何処かで、ひそかに棲息せいそくしているのかもしれないと考えた方が、かえつて科学の心に通ずるであろう。

一億年前の怪魚

『コンテキキ号漂流記』の著者は、まことに巧いことをいつている。古代インカ帝国の住民が使っていたのと、全く同じ筏いかだを造つて、この若い探検家は、南米からタヒチ島の近くまで、自分で漂流を試みたのである。そして南太平洋の大洋の真中まんなかで、いろいろ不思議な生物に遭遇している。

近代の文明人は、大きいそして強力な汽船を造つて、即ち科学の巨大な力を利用して、七洋くまを隈なく調べつくしているが、唯一ただ一つ大切なことを忘れてゐる。それはそういう立派な汽船は、船体も大きくまたスクリューの音も大きいということである。近代の探検船では遭遇しなかつた怪物を、筏の漂流者が目撃することがあつても、別に不思議ではない。海面すれすれのところに、じつと坐りすわ込んで、二カ月以上も潮流と風だけに送られて、あの広大な太平洋の真中を漂つてみた人は外ほかにはいない。そういう人間だけにその姿を見せる怪異な生物がいたとしても、別に不思議ではない。この漂流者は若い考古学者であつて、小説家ではない。しかもこの冒険は、今度の大戦後に行われた、ごく最近の話である。

海はあまりにも広く、船が通るところは、その極めて僅わずかな部分にすぎない。しかもわれわれの知識は、海面からごく近いところの水中だけに限られている。深海探測といつても、調べ得るところは、海の面積から見たら問題にならない。大洋の唯中、その深所には、

何が棲すんでいるか、人間の想像の及ぶところではない。その一番良い例としては、先年南アフリカの海底から、少くも五千万年以上、多分一億年くらいの太古の怪魚が、本当に生きた姿で出現した異常な事件を挙げるべきであろう。

それは昭和十三年十二月二十二日のことであつた。即ち日華事変にが最高潮に達していた頃の話である。英領南アフリカ喜望峰の近くに、東倫敦イースト・ロンドンという小さい漁港がある。その西方数哩マイルの海底から、トロール網にかかつて、不思議な魚が揚あがて来た。全体長一米半、目方七十五匁キロの大きい魚で、全身は青色に輝いた金属光沢を帯び、魚体は脂あぶらぎつてぴかぴか光っていた。頭は西洋兜かぶとのような形をし、胸及び腹の鰭ひれは、赤児の腕の先に羽がついたような怪異な恰好かっこうになつている。更に著しい特徴は、脊せき柱ちゆうがずっと尾鰭おびれの真中をつき抜けて伸び出ていることである。如何いかにも古色蒼然そうぜんとして、一見古代生物の異風をそなえた曲く者せものであつた。この怪魚こそは、中生代の白堊紀はくあき、即ち少くも五千万年以上の太古において、既に地球上からその姿を消していた、総鰭魚類そうきぎよるいの空棘魚科くうきよくぎよかに属する化石魚であつたのである。

この種類の化石魚は、古代生物としても、非常に古いもので、巨大爬虫類はちゆうるいのデキノザウルスなどが、その怪異な姿を見せていた時代、即ちジュラ紀よりも、更に一億年近い太

古において、既に地球上に出現していたものである。最初にこの魚類の化石の現れるのは、古生代のデヴオン紀であつて、それは現在の知識では、現代から、二、三億年も昔のことと推定されている。それからずっとこの異魚は、たいした体形の変化もなく、中生代末の白堊紀即ち、ジュラ紀の次の時代まで、太古の海中に種属の繁栄をつづけて来た。そして巨大爬虫類の怪物たちが、地球上からその姿を消した次の時代には、この魚たちも完全に絶滅してしまつたのである。少くも昭和十三年の十二月二十二日までは、そう信ぜられて来ていた。

ところがその五千万年乃至一億年以前の魚が、突如として南阿の一角に出現し、暫時ではあつたが、現にこの太陽の光の下で、その生命を見せてくれたのであるから、この方面の専門学者たちはもちろんのこと、世界中の人々をあつと驚かせたのも、当然のことである。当時この話は日本の新聞にも載り、また翌年の『科学』には、詳しい紹介がなされた。それは匿名の紹介であつたが、原著よりも分りよい立派なものであつた。しかし丁度その時期は、漢口陥落の提燈行列を過ぎて間もない頃であつた。日本人の大多数は、南アフリカで獲れた奇魚などに、かかわりあつてはいられなかつた。

この話は、コナン・ドイルとはちがつて、本当の話である。その標本は、漁獲後間もな

く東倫敦博物館の主事ラチマー女史の手許てもとに送られた。同女史はこの方面の専門家ではなかったが、その怪魚の異風に驚き、標本のスケッチに簡単な説明をつけて、グラハムスタウンの大学のスミス博士に手紙で報告した。ところが時偶たまたま々クリスマスの季節にあたったために、手紙の配達がおくれ、僅か四百哩マイルを隔てたスミス博士の手に入るまでに十日以上の日子にっしを要した。そしてことの重大さに驚愕きょうがくしたスミス博士が、折返し電話で連絡した時には、残念ながら、魚体は既に腐敗し、外形だけが剥製はくせいとなつて残つていたのである。それでも確かに五千万年以上の昔に絶滅したはずの空棘魚であることは、確認されたのであるが、学問的に最も重要な部分、即ち内臓その他の軟体部分は、遂に神秘的のヴェールの彼方かなたに隠されたまま、闇やみから闇へ葬り去られたのである。

世界中のこの方面の学者たちは、スミス博士の第一報を、英国の科学専門雑誌『ネーチュア』誌上で知つて、驚愕と歓喜との念に打たれ、この発見を「今世紀における動物学界随一の大収穫」とした。まさに文字どおりの奇蹟きせきであつたのである。この発見の意義が、あまりにも大きかつただけに、その重要部分の喪失は、甚しい失望感をもつて迎えられた。その詳細を記述したスミス博士の第二報が、同じく『ネーチュア』誌上に出た時は、世界各国の学者から、激越な批判の手紙がたくさん来たそうである。これは突如冥界めいかいからの

通信に接して驚愕した人間が、いざ話しかけようとした時に、その通信が切れたような感じである。惜しいといえ惜しいが、またそれでよいのだという気もする。それほどの異常事件なのである。

『ロスト・ワールド』の話の前置きとしては、この「化石魚の蘇生」の話くらい巧い話は、ちよつと他に類がないであろう。それで第一夜は、子供たちにこの現世化石魚の話をすることにした。ストーヴに薪を追加しながら、南アフリカの海底から突如として出現した、五千万年乃至一億年前の太古の怪魚の話を知っている子供たちは、戸外の吹雪も、乏しい食糧のことも、すっかり忘れたようであった。

幸いこの詳しい紹介の載っている『科学』が手許にあつたので、一通り話をしたところで、写真を見せてやった。剥製にされた怪魚の写真と、ジュラ紀の空棘魚の復原図とを並べたところを見ると、両者は全く一致している。これにはさすがの長女もいささか驚いたようであった。

復原図の方が、もちろんこの現世空棘魚の出現以前に描かれていたものである。化石として残るのは、たいてい硬骨部分の一部と、その他の部分のかすかな痕跡こんせきとである。そういう断片的な材料をもとにして、化石学者たちは、原体制の復原という困難な仕事をな

しとげる。それはいわば「小説」をつくるのである。しかしこの場合は、その「小説」に
びったりとあつた生きた証拠が出て来たのであるから、その点だけでもまさに驚くべきこ
とである。「ほんとにねえ」と、最後に長女が陥落する。これで『ロスト・ワールド』の
話に、安心してはいって行けるわけである。

アマゾンの秘境

この「探検記」は、チャレンジャー教授の探検隊に参加した『デイリー・ガゼット』の
記者マローン君の手記から成っている。チャレンジャー教授は、かんしゃく癩癩持ちで、人間嫌
いで、時々狂暴性を発揮する人物である。学界からもロンドン倫敦人からもひどく嫌われている
が、動物学者としては、独創的な考えを持ち、かつ甚だ実行力に富んだ人である。そのチ
ャレンジャー教授は、かつて単身南米アマゾン上流の秘境を探検したことがある。アマゾ
ンの上流は、たくさんの支流に分れていて、その中には、まだ白人の足を踏み入れたこと
のない支流がいくつも残されている。

チャレンジャー教授は、カヌーに乗って、その支流の一つをそこう遡航した。そしてインディ

アンの部落で、丁度今息を引きとったばかりの白人の遺骸いがいにあう。その僅わずかな遺品を整理して、この白人は、アメリカのデトロイトの市民ホワイトという人であることを知る。画家でありかつ詩人であるこのホワイト君は、アメリカの物質文化に飽あき果てた挙句あげく、新しい靈感を求めて、アマゾンの秘境を放浪していた男であるらしい。「疲れ切った姿で、クルプリの棲すむ密林の方から、さまよい出て来て、部落にたどりついた途端に倒れた」という以外には、この男のことは何も分らない。クルプリというのは、南米インディアン間に広く行き渡っている伝説で、山の精を意味する。この山の精に遭あった人は、再び生きて人間の社会には戻れないと、昔から確く信ぜられていたのである。

ホワイト君は、死ぬまで肌身はなさず、一冊の写生帳を持っていた。ぼろぼろになったジャケットの下から出て来たこの写生帳が、話の発端である。その中には、いろいろな写生があるが、終りの方に、平原の彼方かなたに、切り立った断崖だんがいに縁ふちどられた高台の絵がある。そしてその次に、巨大な怪物の写生があつて、それでおしまいになっている。そしてそれはジュラ紀の恐竜の一種ステゴザウルスそのままの姿なのである。

初めてチャレンジャー教授を訪れた時、マローン君は、この写生帳を見せられる。そしてランケスター氏の著書に出ているステゴザウルスの復原図とくらべて見て、両者が完全

に一致していることにひどく驚いたのである。これが始まりで、いろいろな経緯の末、けつきよくチャレンジャー教授を首班とする探検隊が、この失われた世界に出かけ、ステゴザウルスやイグアナノドンの生きた姿を見ることになるわけである。南アフリカにおける現世くうきよくぎよ空棘魚くうきよくぎよの発見の話は、このコナン・ドイルの小説を、まさに地で行ったものといえよう。

昨年の暮、英国のエヴェレスト遠征隊が、ヒマラヤで奇怪な人獣の足跡を発見したという記事が、一時新聞紙上を賑にぎわしたことがあった。その時、食卓の話題に上ったのは、この五年前の『ロスト・ワールド』の話である。もう大きくなつた子供たちには、「おやじさんの嘘うそ」もすっかりばれてしまつていたが、人界を遠く離れた、アマゾンの秘境がもつ特異の妖あやしい美しさは、依然として頭の底に残つていたらしい。「ほら、あの失われた世界への入口のところ、カヌーがもう行けなくなるあたりね。あの細い川のところ、あそことても綺麗きれだったわ」といい出したのは、そんなことなどとても憶おぼえていそうもない二女であつた。

探検隊を乗せた二隻せきのカヌーは、隠された細流の入口に達する。浅黄色あさぎいろの葦あしが一面に生い茂つた葦叢あしむらの中を、数百碼ヤードばかり無理にカヌーを押しで行くと、突如として、静か

な浅い流れに出る。水は驚くほど透明で底は美しい砂になっている。川幅は二十碼くらいの狭い流れであつて、兩岸の植物は、自然の豪華ごうしゃの限りを見せている。それはまさに仙境であり、これこそ失われた世界への入口なのである。繁しげり誇たかつた熱帯の草木は、水面上に生いかぶさつて、自然の天蓋てんがいを作り、緑の葉をとおして来る黄金色の日光は、黄昏たそがを思わせる美しさである。その青緑のトンネルの下を、緑の静かな流れが行く。流れの美しさは、樹間を洩もれる光によつて異常な色調を帯び、不思議な美しさを呈している。その輝く水面の上を、カヌーの一ひとか櫂かいごとに、数千の漣さざなみが伝わってゆく。それは神秘的の国への通路として、まことに適ふわしいものであつた。

コナン・ドイルもこのあたりの描写には大分馬力をかけているようである。どうも御本人自身が、ロスト・ワールドにაცოგაれていられるらしいところが大いにある。彼は、何時いつまでも童心を失わなかつた人なのであろう。子供というものは、魚粉と稻茎の粉とのまじつた団子だんごを食つたことは忘れるが、そのとき聞いたアマゾンの秘境の情景は、なかなか忘れないものである。

ヒマラヤの人獣の足跡

もつともすべての大人にも、多かれ少かれ、この童心は残っている。ヒマラヤの怪巨人にしても、何も今度突然出現した話ではない。昭和十一年に、立教大学のナンダ・コット登攀隊が、印度に遠征した時にも、たいへんな騒ぎが起きていたそうである。ヒマラヤ山麓の村に、身の丈四十呎の怪物が現れ、土地の住民はもとより、全印度人の間に大評判になつていた。この怪物は、汽車をまたいだり、大きい樹木を踏み倒したり、婦女子を気絶させたり、散々あばれ廻つた挙句、再び山中深くその姿を消してしまった。その時足跡が残されたのであるが、それは長さ二十二吋、幅十一吋もある巨大なもので、人間の足跡に似た形であつたという。

ヒマラヤの山中に巨人かゴリラか分らない怪物が棲んでいるという伝説は、土地の人たちばかりでなく、印度人の中でも信じている人がかなりある。昨年のエヴェレスト登山隊長シプトン氏の手記によると、ヒマラヤの住人たちは、この怪人をヤティ（縁起の悪い雪男）と呼んでいるそうである。シプトン氏の案内人の一人は、二年前にこのヤティに遭つたといつてゐるが、それは半人半獣の怪物で、背丈は五呎六吋くらい、全身赤味がかつた栗色の毛で蔽われていたが、顔だけは毛がなかつたという話である。

シプトン氏が写真に撮った奇怪な足跡を、動物学者たちは、ラングール猿だと鑑定したが、シプトン氏は大分不服のようである。『朝日新聞』に連載された氏の手記の中から、これに関係した部分を抜萃ぼっすいしてみるのも、興味あることであろう。この足跡を発見したのは、昨年十一月八日のことで、エヴェレストに近いメンルンツエの氷河の上である。

「われわれは午後三時半、峠の向う側の氷河に達し、南西の方向に下って行った。丁度午後四時、行く手の雪の上に奇妙な足跡を発見した」 「奇怪な生物は少くとも二頭以上が打ち連れて通ったことが、入り乱れた足跡によって確認された。その大きさはわれわれの山靴の跡よりは幾分長く、幅は非常に広かった。詳しく調べると、三本の幅広い足指と、別に横に張り出した大きな親指とが認められた。われわれはその足跡を追って一哩マイルあまり氷河を降ったが、氷がモレインに蔽われた場所で、はつきりと切れていた」

この足跡は、写真撮影もされ、また観察者がちゃんとした人だけに、汽車をまたいだ怪巨人の話とは少しちがった意味がある。従つて動物学者たちも、放っておくわけには行かない。鑑定の結果、ラングール猿ということになったのであるが、これに対するシプトン氏の反対意見には、もつともなところがある。

第一に、ラングール猿は菜食動物であるが、高度一万九千呎の氷河の上で、植物は何が

あるのだろうか。肉食動物ならば、氷河の下部にはモルモットもチベット鼠ねずみも棲んでいるので、それらを常食として生きて行けるが、菜食動物は、こういうところでは、生存し得ないはずである。

第二に、ラングール猿の足形は、どんなに大きいものでも、長さ八吋を越えるものは、今まで知られていない。ところが問題の足跡は、十二吋以上と実測されている。もっとも多くの足跡は形が崩れているので、雪解けのために、幾分大きくなったと考えられる。しかし氷河の氷の上に積っていた雪は、きわめて薄く、かつ足形がはつきり残っていたところから見て、雪が解けて大きくなったとしても、大したちがいはないはずである。それでこの怪物は、既知のラングール猿よりは、遥かに大きい生物にちがいない。

この議論の当否は、ここで論議すべき問題でない。唯一つ確かなことは、シプトン氏が「私はこの問題については門外漢で、くちばし 嘴を入れる筋すじあい 合のものではないが」動物学者の鑑定には異論があると言った、そのこと自身の中に、彼の童心が認められる点である。

ヒマラヤでは、この前年、即ち一昨年にも、アッサム州の密林ジャングルの中に、体長九十呎、身丈みのたけ二十呎の怪物が出現して、住民を震えふるえ上らせたという話がある。体長九十呎のこの怪物は、ジュラ紀の恐竜デインザウルスに似た形をしていたといわれている。ロスト・ワールドの

夢は、原子力の世界にも、なおその生命を保っているのである。

イグアノドンの唄^{うた}

『ロスト・ワールド』の話の中で、一番子供たちに人気のあったのは、大きいくせにおとなしいイグアノドンであった。このジュラ紀の肉食性巨大爬虫類^{はちゆうるい}を、コナン・ドイルは原始人類の家畜となし、象の皮膚のようなその皮の上に、粘土のマークをつけさせた。それを地質年代の錯誤と早まっではいけないので、同じ時代の空棘魚^{くうきよくぎよ}が、喜望峰州の住民と、先年ちゃんと対面をしているのである。

イグアノドンが、子供たちの間で如何^{いか}に人気があったかは、次の唄でも十分うかがうことが出来る。

イグアノドンの背中に

ゴリラが乗ってた 乗ってた

ゴリラの背中に

お猿が乗ってた 乗ってた

お猿の背中に

鼠ねずみが乗つてつた 乗つてつた

鼠の背中に

蚊かとんぼが乗つてつた 乗つてつた

蚊とんぼの頭の上を

艦載機が飛んでつた 飛んでつた

このイグアノドンの唄を作ったのは、下の男の子である。自分の国の敗戦も、自分の身体たいの栄養低下も、実感としては何も知らなかった子供たちは、カインの末裔まつえいの土地で、「イグアノドンの唄」をうたつて、至極御機嫌ごきげんであった。しかしその男の子は、その後間もなく、栄養低下が禍わざわいして、仮りそめの病気がもとで、急に亡くなつてしまった。しかし生き残つた娘たちは、今はきわめて元気である。

この暮から正月にかけて、私は扁桃腺へんとうせんの除去と、蓄膿症ちくのうしょうの手術とのために、K病院へ入院した。二十年来の懸案を片づけるためである。この道では、日本一の名国手こくしゅと称たえられているK博士の手術を受けるのであるから、何の不安もなく、経過もきわめて順調であった。

時々妻と交替に付き添いにやって来た長女は、何も用事がないので、初めは少し手持無沙汰ぶさたのようであった。それで或る日、『ロスト・ワールド』を持ってやって来た。昼寝をするために、夜早く寝つかれなかった私は、十二時頃まで寝つこうとしないことにして、ベッドの上でぼんやりしていた。時々ちよつと目をやると、長女は夢中になって、読みふけている。「どうだい、面白いのかい」ときくと、「うん、とっても」と、返事をするのも億劫おっくうなように、頬ほおをほてらせている。

「分るのかい。大分むつかしい名前があるだろう」といっても、「そうよ。でも辞書なんか引いていられないのよ。今失われた連鎖ミッシング・リンクがやって来るところよ」と、受け付けもしない。もう夜中近いらしい。それでよいのだ、生きる者はどんどん育つ方がよいのだと、私は目をつぶって寝入ることにした。

(昭和二十七年四月一日)

青空文庫情報

底本：「中谷宇吉郎随筆集」岩波文庫、岩波書店

1988（昭和63）年9月16日第1刷発行

2011（平成23）年1月6日第26刷発行

底本の親本：「イグアノドンの唄」文藝春秋新社

1952（昭和27）年

初出：「文藝春秋」

1952（昭和27）年4月1日

※表題は底本では、「イグアノドンの唄《うた》」となっています。

※初出時の表題は「大人のための童話」です。

入力：門田裕志

校正：川山隆

2013年1月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

イグアノドンの唄

——大人のための童話——

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 中谷宇吉郎

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>